

# Lilium' Casa Blanca'



AdultOnly / Novel

## session.1.5 -supplement-

キャスパーはこのところ、端から見てもすこぶる上機嫌であった。

トージョとの情事、中でも初回を思い出すと笑みに覆われた顔がますますほころぶ。やはり「初めて」の相手というのは好いものだ、そんなふうに思いながら。

事実、トージョのその時の反応は実に面白いものであった。

割り切ったのか何かを諦めたのかその腹の内までは窺い知れぬが、キャスパーの申し出を存外とすんなり受け入れ、彼の頭を己が自身へと引き寄せはしたものの、その動きは実にぎこちなかった。そんな様子を可愛らしいと思いつつながらトージョのソレを口に含むと、舌を絡め唇で扱き昂りを煽動した。

「ぐっ……」

トージョの呻きと共にビクリと反応しながら硬く膨らんだソレに、軽くキスをして上を向いた。

「もうちょつとリラックスしてくれると助かるんだけど」

見るとトージョは、左手で眼鏡ごと目を覆い横を向いて何やらブツブツと呟いている。





「え？何？」

キャスパーは這い上がってトージョの口元に耳を近づけた。

「……なんでそんなに巧いんだよ……」

嘆息混じりに出たトージョのそのひとことに、キャスパーは思わず嘔き出す。なんて可愛いのだろう。部下とはいええ六、七歳ほど年上であるこの日本人男性に対し、改めて好意を抱いた。

戯れるようにトージョの下唇を啄むと、

「もつとよくしてあげるから、僕のことも気持ちよくしてくれよ」

と云い残してまた元の位置へと戻り、この間に膨らみを増したトージョの性のしるしに再度舌を這わせた。丹念に舐め上げその下の球体を口に含み転がす。その動作のイチイチにトージョが反応を示すので、愉しくて仕方がない。

「そんなにイイかい？」

トージョに尋ねながら先端を舌先で軽く刺激した。透明でやや粘性のある液体を滲ませ、申し分なく硬くいきり勃たせている。トージョは何も云わなかったが、此れが答えだと受け取っておくことにしよう。そう思うとキャスパーは満足感を得た。

しかしこの様子では、コレを受け入れる準備をトージョが施してくれるのは無理だろう。キャスパーはそう判断し、ベッドの枕元に忍ばせておいたローションを取りに移動し



た。

「動けるならこつちへ来ないか？いろいろ楽だろう？」

「——いや……いい、無理」

また可愛いことを云うものだ。キャスパーは益々トージョを気に入った。どう自分色に染めようか。そんなことまで考えた。

「まあいい。ソファでも充分動けるな」

しかし、自分に「色」なんてあるのだろうか。色が無いとすると自分が誰かに変化を齎もたらす事も、そもそも無いのかもしれない。

「僕は僕の準備をするけど、君、その間どうする？」

「どうする、って云われても……」

「じゃあ君を退屈させないように、此处でしようか」

考えるのは止めた。ただ衝動のままに突き進むのもたまにはアリだろう。

キャスパーはTシャツ一枚の姿になりトージョの下腹部に股がると、闇に対して尚明るい挑発的な瞳で見下ろした。

「折角だからこつちを見てよ、トージョ」

「うわつ、やめろ!!バカッ」

トージョの顔に手を伸ばし、その目元を隠していた左手を取り除く。トージョはチラリ



と横目でキャスパーを見た。怯えを含みながらも快感に抗えないといった眼だろうか。オレンジ味掛かったルームライトに邪魔されて判別しにくいのが、きつと耳まで真っ赤になっているのではなからうか。

(こんなに殊勝な奴だったか?)

普段見せる調子の良さからは想像がつかないその表情に釣られ、キャスパーはお得意の笑い声を発した。

「フーフ。バカはないだろ、仮にも上司に向かつて。ああ、仮だからいいのか。君と僕とは協力関係だからな。それと、さっきの「此れも仕事のうちだ」って話、あれは冗談だよ。僕にしては珍しく個人的に興味を持っているんだ、君に」

舌舐めずりをしてローションの蓋を開ける。左の掌に必要な量を垂らすと右の指先に取り、後ろ手で自身の窄まりに挿し込んだ。その際ローションの付いた指がトージョのモノも掠めたので、トージョが変な声をあげた。

「ひゃっ!?冷てッ」

「んっ……ごめん、温めておくの、忘れた……」

「——大丈夫か?キャスパー?」

トージョがキャスパーを窺うと、苦し気に眉根を寄せ常に纏っている笑みが消えていた。伏した銀の睫毛と潤んだ青い瞳がオレンジの光を反射し妖しい色彩を浮かべる。見た



事もない表情と甘い吐息混じりの声に感じるものがあつたのか、その頂は更に張り詰めた。

「大丈夫だから……もう少し、待って」

更に指を増やして動かすと蓄もほころび始め、安堵から表情も柔らかくなり、徐々に息遣いも荒くなる。併せて前の方も熱が溜り始めた。

「あつ、ん……トージョ……」

喘ぎとともに自然と名前が口を吐く。早く君の情熱で満たしてくれ。その欲求から指の動きが大きくなり、意識が散在し始める。

頬に何かが触れたことで、少しだけその意識が引き戻された。

「……キヤスパー」

上体を起こしたトージョの指であつた。トージョはそのままキヤスパーの襟首に手を回すと、引き寄せながら再びソファに背中から倒れ込んだ。

先程掛け直した筈の眼鏡は、また元の場所に戻されている。

トージョは倒れ込みながら背中へと滑らせた手に力を入れ、キヤスパーを強く抱きしめた。

「貸せよ。俺が……やってやる」

キヤスパーはその言葉を受け、闇に融け込むトージョの髪へ顔を埋めながら、愉快そうにほくそ笑む。



「最後まで、かい？」

「ああ。最後まで、だ」

吸われた喉を甘く鳴らすと同時に抱擁が緩んだ。Tシャツの裾を捲し上げ、肌触りを確かめるように肉厚で無骨な手が這う。背中から腰にかけて丹念に撫で回しながらゆつくりと移動し、適度に柔らかく整った白い丘を越えた。谷間に沿って進み、キヤスパアの指で柔らげられた入口に到達すると、動きを止める。躊躇があるのだろう。

焦れてキヤスパアは身を振らせ、動きを促すように、

「……トージョっ……ねえ……」

甘えた声で呼んだ。

返事をする代わりにトージョは柔らかな綿の布越しにキヤスパアの胸の突起を噛む。

「あっ——」

鼻に抜ける艶美な声を発てながらキヤスパアが上体を反らした瞬間、トージョの指がツブリと挿入り、ゾクツと背筋に快感が奔った。

「んっ……トージョ……」

トージョの頭をぎゅつと抱きしめる。異物感が堪らなく心地好い。

「そのまま、奥まで、掻き混ぜて……」

「……りよーかい」



トージョは今度は直に突起を強く吸うと、指を二本に増やして入口を拡げる。キャスパアの意識は再度散り散りに飛び跳ねた。トージョの動きに併せて婀娜な声をあげ、カラダも跳ねる。無骨で節くれ立った指が抜き差しされ旋回する。快感が尾骶骨を抜けて脊椎を通り頭の芯に伝わり、辛うじて残留した意識までもが蕩け出す。前立腺の刺激が淫茎にも響き喜びが蓄積される。

「キャスパア、その……腕、苦しい」

「……ん？—あ、ごめ……ん」

無駄とはいえ多少は快感に抗おうと、トージョの頭をかなり強く絞めていたらしく、キャスパアは慌てて力を緩めてトージョの額に唇を寄せた。

姿勢が楽になったのか、トージョはキャスパアを攻め立てる指の動きを速くする。

「ふ、あッ……んッ、いいよ……」

キャスパアはトージョの胸に預けていた上体を起こし自ら腰を動かした。胸元までたくし上げられたTシャツが、染み出した汗を吸って纏わり付く。媚やかな両腕を胸元で交差し、もどかし気に身をしながら今では邪魔モノでしかない布を剥ぎ取る。

その一連の動きがトージョには妖艶に映り、魅惑され、

「あー……挿れてえ」

露わになったキャスパアの胸にそっと触れると、溜め息を漏らしながら呟いた。